

高校生活、すべてキャリア教育

第33回時事通信社「教育奨励賞」推薦校の実践⑱

●奈良県立二階堂高等学校

奈良盆地の中央、奈良県天理市に位置し校舎から大和の山々をぐるりと一望できる県立二階堂高校(岡本雅至校長、生徒数566人)は、県内唯一の総合学科の高校だ。「キャリアデザイン科」と称する同校の総合学科は、一般的なカリキュラムを提供するだけにとどまらず、県の拠点校として、地域の課題解決学習やインターンシップなど高校生活のさまざまな領域で機会を提供し、将来どんな自分になりたいのかを考え、必要な社会人基礎力を伸ばすキャリア教育を推進している。(肩書等は取材時)

マニュアル人間はつくらない

普通科高校として開校した同校は、2015年度に「キャリアデザイン科」に改編された。もとも就職希望者が多く生徒の進路が多様だったため、改編以前からキャリア教育に力を入れており、高い評価を受けていた。そんな中、当時県内唯一の総合学科を置いていた高校が普通科に移行したことを受け、「さらに一人一人の進路に細かく対応するため」(岡本校長)、総合学科に改編した。改編4年目を迎える同校のキャリア教育は、今



課題解決学習の中間発表に向けて議論する生徒の代表ら

も進化の真つ最中だ。今年は何と、秋の文化祭を廃止。代わりに「地域の課題解決」に向けた新たな教育の場を設けた。生徒は自分の目で地元天理市の課題や長所を発見、1年間かけて研究を深め、秋には天理駅前広場「コフフン」を借り切り、文化祭に代わり地域活性化に向けた提案の中間発表会として「二階堂フェスタ」を行う。天理市や、県内の5大学と連携した授業で、文部科学省の実践研究にも選ばれている。

今年中心となる2年生は、4、5月に市内の駅前商店街や住宅街でフィールドワークを実施。取材を行った6月、4組では奈良女子大学の教授を迎え、生徒が発見した課題を元に研究テーマの案を考えていた。「SNSで町の魅力を発信しては」と発言した生徒に対し、教授は「何でそれが地域活性化につながるの？」などという問い掛け、生徒が得

た着想を深めさせる。一方、1組ではテーマ案を発表した。生徒は「商店街で閉じているシャッターを数え、なぜ閉まっている店が多いか調べる」「市には遊ぶ場所が少ない。なぜ公園が無くなったのか」など、多様な視点で案を提示。担任の木下正貴教諭は「生徒たちの発想力や自分たちで行動する力が伸びてきた」と話す。

「どんな客層をつかむ? 来年度のリーダーをどう増やすか」「各部門にどう責任を持つて働いてもらう?」まるで企業の会議の一場面だが、これはフェスタ実行委員会の生徒の議論の様子。発表方法を考えるのも生徒の役目だ。客の呼び込みから会場の設営など、企画するのはすべて生徒。担当する森田宏彰教諭は「学校が望む方向に誘導はしない。答えは一切与えない」と話す。

取り組みの目的は、同校が教育目標に掲げる社会人基礎力の育成だ。自分の暮らす町に出て、地域が抱える課題を見つけ、解決策を考える作業を積むことで「課題発見・解決型」の生徒を育成する。また、地域の人に取材し協力を申し込む経験から地元とのつながりが生まれるほか、人と接するマナーや交渉力など働く上で必要な力を養う場でもある。2年生で実行委員会の田増渉歩「取締役社長」(実行委員長)は「フェスタは生徒が学校の代表として、地域での評価を上げるためにやる。進学や就職を自分の意志で決めていくのに、このイベントを自分たちで作り上げる体験は大事だ」と胸を張る。

同校は専門の「キャリア教育部」を置く。一般

的な高校の進路指導部に当たるが、3年次の進学や就職の進路支援にとどまらず、高校生活の全領域で将来について考える教育を行う。米倉信岳部長は、同校のキャリア教育は入学前に始まると話す。

米倉部長は毎年、県内の中学校でキャリア教育の講演を行う。同校の実績といった「学校の宣伝」ではなく、変化の激しい現代社会に対応するために必要な社会人基礎力や、高校選別のポイントや就職活動の実態を強調する。本場に二階堂高校が合うのか、中学生に主体的に考えさせ、進学先のミスマッチを減らすのが狙いだ。また、4月に入学する新1年生に対しては、在校生が心構えや高校生活について「入学前教育」を行う。

1年生は入学してすぐの6月と8月に、地元で病院や介護施設を運営する奈良東病院グループでインターンシップを行う。取材を行った日、生徒たちは介護施設でお年寄りと話したり、入浴や髪を乾かす手伝いをしたりといった体験をした。緊張しているのか、ぎこちない様子の生徒も見られ、休憩時間に感想を聞くと、「(お年寄りと)しゃべるのが難しい」と困惑する声がある一方、「もともと介護職を考えていて、今回その気持ちが強まった」とする生徒もいた。

2年次は希望者に対し、放課後に自分のキャリアを考えさせる「サクセスセミナー」を実施。米倉部長らが直接生徒に語り掛け、進路情報を伝えるのはもちろん、進学する意義やなぜ就職するかを考えさせる。進学・就職希望者ごとに集まっ

て学ぶので、同じ目的を持つ者同士刺激し合うのも狙いだ。その他、地元企業の協力を得て、今年4月の大学進学が決まった生徒に、事前に大学の研究を疑似体験する「大学入学前教育」を行うなど、入学前から卒業後までを捉えた、高校生活全領域でのキャリア教育を実施している。

学びは校内にとどまらない。ある土曜日、真剣なまなざしでマネキンの髪に機具を巻くのは、同校2年の中山瑞綺さんと小妻陸人さんだが、2人が学んでいるのは県内のル・クレエ櫃原美容専門学校。二階堂高校では同専門学校と連携し、1年次に出席授業やガイダンスを用意しており、希望者は2年次からダブルスクールで学べる。高校卒業後に学び始めるのと比べ、2年早く国家試験に挑戦できるメリットがあるほか、離職率が高い美容師業界とのミスマッチも防ぐなど、効果的な実学教育を行う。

米倉部長は同校のキャリア教育の目的を「生きる力を付けること」とする。「マニュアル人間はつくりたくない。その場その場で自分の考えを持つて行動できる人間になってほしい」と話す。

初の卒業生、進路選択が主体的に

今年3月、キャリアデザイン科の1期生179人が卒業した。進学や就職など進路はそれぞれだが、彼らに通底するのは自分の将来を自分で考え、主体的な進路選択を行った点だ。

同校ではこれまで、大学進学の場合「どこに行けばいいかわからない」という理由で、消極的に

指定校推薦を選ぶ生徒が少なくなかった。が、今年の卒業生は8割以上がこの仕組みを使わず、自ら学びたい大学・学部を選び、それに向かって努力するようになったという。以前よりも高いレベルの大学に進む生徒も増えた。専門学校に進む生徒も、明確な目標を持って進路を選択し、特にインターンシップや福祉に関する選択科目のためか、看護系の学校に進む生徒は2倍強に。就職希望者は、自分の志望動機をしっかりと語ることができ、生徒が増え、前年度よりも「冒険した」就職活動を行ったが、全員が内定を得た。

岡本校長は卒業生が「キャリアデザインをしっかり考えている。先をしつかり予測して自分の進路を考えるようになった」と見る。また、「一番身についたのは、自分で考える力。そしてそれを伝えるコミュニケーション能力。入学時は自己肯定感が高くない生徒が多かったが、自信を持つて意見を発信できている」とする。

卒業生のアンケートもそれを裏付ける。「自分で考える力や自主性を伸ばすことができた」とする生徒が76%、「コミュニケーション能力が伸びた」が77%など、3年間の学びで自分の力の伸びを実感しているようだ。

岡本校長は、今後の同校の教育について「キャリア教育の先進校として、常に新しいことをする高校でありたい。教職員が挑戦し続ける姿勢を貫くことで、生徒も常に磨き合い、共に輝く、そういう学校でありたい」と話した。

(岩嶋紀明 奈良支局)